

序論)

みなさんは、無視されて、裏切られた経験というものがあるでしょうか。

マザー・テレサは「愛の反対は憎しみではなく、無関心である」と言いましたが、一切の関心を向けられず無視されるというのは、存在そのものを否定されるような非常に悲しいことだと思います。しかも、それが今まで親しくしていた人だったり、愛情を注いでいた人だったりしたらどうでしょうか。心が裂けるような思いになるのではないのでしょうか。

神様が、イスラエルに対して抱いていた感情は、まさにそのように心が裂けるような思いだったのではないのでしょうか。

今日は、『わたしはここだ、わたしはここだ』と言いながらも無視された【主】がどのようにされるのかを、みことばから教えられていきたいと思います。

1) 「わたしはここだ」と言われる【主】

65:1 「わたしを尋ねなかった者たちに、わたしは尋ね求められ、わたしを探さなかった者たちに、わたしは見出された。わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、『わたしはここだ、わたしはここだ』と言った。

65:2 わたしは終日、頑なな民に手を差し伸べた。自分の考えのまま、良くない道を歩む者たちに。

ここで「わたしを尋ねなかった者たち」とか、「わたしの名を呼び求めなかった国民」、「頑なな民」と呼ばれている人たちが誰のことを指しているのかは、解釈が分かれるところなのですが、まずはイザヤ書の文脈からこの人たちのことを理解すると、これはイスラエル人のことを指しています。

先週読んだ 64 章の 7 節にはこのような告白がありました。

64:7 しかし、あなたの御名を呼ぶ者はなく、奮い立って、あなたにすぎる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの咎によって、私たちが弱められました。

罪を犯していたイスラエルは、それでも【主】を呼ぶことなく罪を繰り返していたのです。しかし、【主】はそのような人々に対して (65:1 表示) 『わたしはここだ、わたしはここだ』とご自分の存在を示し、頑なな民たちに終日、手を差し伸べ

続けてくださったのです。ここで『わたしはここだ、わたしはここだ』と訳されている元のヘブライ語を直訳すると『ここだ。わたしを見よ。ここだ。わたしを見よ。』となります。【主】は、【主】を無視し続ける民たちに対してずっとご自分の存在を主張され続けてこられたのです。

聖書を一通り読んで思うことは、【主】はいつもご自分の存在を私たちに語りかけ続けておられ、それに対して人間はいつも無視し続けているのだなあ、ということです。神様はモーセにご自分のことを「わたしは「在る」というものである」と言われました。簡単に言えば、「わたしは存在そのものなんだ」ということです。どんなに人が否定したり、無視したりしたとしても、【主】は確かに存在されており、民たちに対していつも「わたしを見よ」と語りかけ続けておられるのです。

2) 【主】に背いて高ぶる民

ところが、その【主】に選ばれ、救い出され、神の民にされたイスラエルはどうしたのでしょうか。3-5節を読みます。

65:3 この民はいつもわたしに逆らってわたしの怒りを引き起こす。園の中でいけにえを献げ、れんがの上で犠牲を供え、

65:4 墓地に座り、見張り小屋に宿り、豚の肉を食べ、汚れた肉の汁を器に入れ、

65:5 『そこに立っていよ。私に近寄るな。私はあなたにはあまりにも聖なるものだ』と言う。これらは、わたしの怒りの煙、終日、燃え続ける火である。

3節の「園の中でいけにえを献げ、れんがの上で犠牲を供え」というのは、【主】が定められた礼拝のルールを守らず、勝手に異教的な礼拝をささげていたことを指します。神様はどこで礼拝をするように言われたのでしょうか？ そうエルサレム神殿でいけにえを献げて礼拝するように定められました。また、その時に用いられる祭壇はレンガのように人工的に作られたものではなく、自然の中にある石をそのまま使って作るように定められていました。それなのにイスラエルは、エルサレム神殿ではなく、園でいけにえを献げ、自然な石ではなくレンガで作られた祭壇を使っていたのです。これはまさに偶像礼拝のやり方で礼拝をささげていたことを意味しています。

また、4節の「墓地に座り、見張り小屋に宿り、豚の肉を食べ、汚れた肉の汁を器に入れ」というのは、イスラエルが汚れた行為をしていたことを示しています。旧

約聖書の律法において死体は汚れたものとされていますから、墓地に座ることは当然汚れた行為ですし、豚も汚れた動物です。「見張り小屋に宿り」というのは、当時のイスラエル近隣の文化の中には見張り小屋は死者を弔うために建てられ、そこで夜を明かすことで死者の霊と交信しようとする習慣がありましたので、そのことだと思います。死者と交信をしようとする霊媒もまた、旧約聖書で禁止されている行為です。

そして、このように偶像礼拝や汚れた行為をしていたにも関わらず、彼らは**5節**のように人々に対して、自分たちは聖い存在だといって、他の人々を見下していたのです。**5節**を読んでみましょう。

65:5 『そこに立っていよ。私に近寄るな。私はあなたにはあまりにも聖なるものだ』と言う。これらは、わたしの怒りの煙、終日、燃え続ける火である。

当然、これは【主】の怒りを買う行為です。

3) 罪に報いる【主】

だから、【主】はそのように【主】に背き、汚れた言動をしている者たちに対して**6節**、**7節**のように言われています。

65:6 見よ、これはわたしの前に書かれている。わたしは黙っていない。必ず報いる。わたしは彼らの懐に報いる。

65:7 おまえたちの咎とおまえたちの先祖の咎をともどもに。——【主】は言われる——彼らは山の上で犠牲を供え、丘の上でわたしをそしった。わたしは、彼らのかつての行いを量って、彼らの懐に報いる。」

これは【主】に背くものに必ず報いの裁きをくだされるという、【主】の宣言です。神様は、【主】に逆らう者に必ず報いの裁きをくだされるのです。

4) 本当のしもべには祝福を与える【主】

じゃあ、その【主】の裁きはイスラエル全員に無差別でくだされるのかということではありません。【主】に逆らう人々の中で、それでも【主】のしもべとして歩み続ける人たち、イザヤ書ではよく「残りの民」と言われている人たちに対してはちゃんと裁きではなく、祝福という報いを与えると言われています。

8-10 節を読みましょう。

65:8 【主】はこう言われる。「ぶどうの房の中に甘い汁があるのを見れば、『それを損なうな。その中に祝福があるから』と言うように、わたしも、わたしのしもべたちのために、そのすべては滅ぼさない。

65:9 わたしは、ヤコブから子孫をユダから、わたしの山々を所有する者を生まれさせる。わたしの選んだ者がこれを所有し、わたしのしもべたちがそこに住む。

65:10 わたしを求めた、わたしの民にとって、シャロンは羊の群れの牧場、アコルの谷は牛の群れの伏すところとなる。

神様は、【主】に逆らう人々の中にあっても、それでも【主】に従う民、【主】からの相続地を受け取る人たちを生まれさせて、その人達に相続地を与えられています。

10 節の「シャロンは羊の群れの牧場」の「シャロン」というのはイスラエルの地中海沿いに広がる肥沃な平野のことで、この地は農業や牧畜に適していました。しかし、バビロンによって人々が連れさらされると、その平野は荒れ果ててしまったのです。私たちのいる富川や、平取にも、元牧場とか元畑の土地がありますね。もともとは馬がいっぱいいたんだろうなあ。とか、お米が植えられていたんだろうなあ。というところも、人の手が入らなくなると途端に雑草が生え、荒れてしまいます。

それと同じようにシャロンの肥沃な土地も、もともとは農業や牧畜で用いられていたんですけど、バビロン捕囚によって荒れ果ててしまったのです。でも、神様はその土地をもう一度、羊の群れがいこう牧場にしてくださると言われています。

同じく 10 節の「アコルの谷」というのは、アカンという人が神様の命令に逆らって罪を犯し、その罪によってイスラエルが敗北した地であり、そのアカンが石打の刑で殺されたところです。聖書的には罪によって呪われた地がこの「アコルの谷」なのですが、神様はその「アコルの谷」を「牛の群れの伏すところ」つまり、神様の祝福があるところに変えてくださると言われています。

神様は、すべてのものを問答無用で裁かれ、滅ぼされるお方ではありません。例え、まわりの人が【主】を無視し、【主】に背いていたとしても、それでも、【主】を信じ、【主】に従い続けるものに豊かな祝福を与えてくださるのです。その祝福とは、失われた豊かさを取り戻させる祝福であり、罪の呪いを祝福に変えてくださる祝福です。

だからこそ、私たちは、例え周りの人たちが【主】を無視し、【主】に背いたと

しても、【主】に従い続けるのです。

5) 【主】を捨てた者への裁き

そして、最後、【主】は、【主】からの呼びかけ、「わたしを見よ。」「わたしはここだ」という呼びかけを受けながらも、【主】を捨てた者たちに対する裁きの具体的な内容を語られています。11節、12節を分けて読みましょう。

65:11 しかし、おまえたち、【主】を捨てる者たちよ、わたしの聖なる山を忘れる者、ガドのために食卓を整える者、メニのために、混ぜ合わせた酒を盛る者たちよ。

「ガド」と「メニ」とういのは、偶像の名前です。「ガド」は幸運を司る神として礼拝されていた偶像で、「メニ」は運命や宿命を司る神として礼拝されていた偶像です。【主】からの呼びかけを受けながらも【主】を捨てた人たちは、このような偶像に礼拝をささげていたのです。

みなさん、宝くじで1等を当てて大金持ちになりたいとか、自分の運命を変えてほしいとか思ったことはありませんか？ 当時の人たちはそういった欲望に支配されて、【主】ではなく偶像により頼むようになったのです。

【主】はそのような人たちに何をされるのでしょうか。12節では(12節表示)「わたしはおまえたちを剣に渡す。それで、おまえたちはみな、虐殺されて倒れる。」とされています。徹底的に滅ぼされるということです。

なぜ、そこまで徹底的に彼らを殺されるのでしょうか。それは彼らが【主】の呼びかけに応えなかったからです。

結論)

みなさん、今日の箇所はイザヤ書の文脈では、【主】に背いたイスラエルに対して語られていることばです。では、私たちに一切関係がないのでしょうか。

実は、最初に読んだ1節のみことばをパウロはローマ人への手紙で引用してこのように言っています。

ローマ 10:20

また、イザヤは大胆にもこう言っています。「わたしを探さなかった者たちにわたしは見出され、わたしを尋ねなかった者たちに自分を現した。」

これはパウロが異邦人にも福音が広がっているとういことを語る文脈の中での引用です。ローマ 10:12 を読みましょう。

10:12 ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。同じ主がすべての人の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになるからです。

イスラエル人の中には、【主】に従い続けた残りの民がいましたが、しかし、多くのものは【主】に逆らい偶像礼拝をし、汚れた行いをしていました。だから【主】は、『わたしを見よ』『わたしはここだ』という語りかけを、【主】を信じなかった異邦人にも広げてくださったのです。

つまり、どういうことでしょうか。異邦人である私たちも、イスラエルと同様、【主】によって『わたしはここだ』『わたしを見よ』と呼びかけられている民だということです。

問題は、この【主】の呼びかけにどのように応じるかです。みなさんは、【主】の呼びかけを知りながら応えなかった、イスラエルのように【主】に救われていながら、【主】を無視して、この世の人たち、つまり偶像を礼拝している人たちや、自分中心の生き方、自分の欲望を優先する人たちと同じ歩みをするのでしょうか。

それとも、「残りの民」と呼ばれ、【主】に生み出された民たちと同じように、周りの人たちが【主】を無視して、【主】に逆らっている中にあっても、【主】を見上げ、【主】に従い、【主】にだけ礼拝をし続ける歩みをするのでしょうか。

【主】は、今日の箇所ですべての結果を明確に示し、私たちに【主】に応答するかどうかを求めています。

是非、【主】の呼びかけに応える者となりましょう。

具体的には、【主】を見上げる時、【主】を見るときを第一にしましょう。

日々のデボーションや家庭礼拝を忠実に守り、礼拝を大切にしましょう。

みなさんにとって、【主】を見ることを妨げるもの。偶像礼拝になっているものは何でしょうか。このあとの「応答の時」に、デボーションや家庭礼拝、主日礼拝を守ることを妨げるものがないか、黙想してみましょう。

そして、【主】を見ることを邪魔するものが見つかったならば、それをやめる決心をし、その偶像礼拝から離れることができるように【主】に祈りましょう。

お祈りをします。

応答のとき

1. 主を見上げる時（デボーション、家庭礼拝、主日礼拝）を大切にしているか？
2. 神様を見ることを妨げるものは何か？黙想する。
3. 妨げとなるものをやめる決心をし、神様に従う祈りをする。